

活動報告

全学FDワークショップ@三軒茶屋キャンパス 報告書

山添 謙*

日本大学危機管理学部

Report on Whole Faculties FD workshop at Sangenjaya Campus

Yuzuru YAMAZOE

College of Risk Management, Nihon University

This is a report on whole faculties FD workshop at Sangenjaya Campus which was held on September 28th, 2019. The theme of the workshop was solving the problem of the first year experience in Sangenjaya Campus. There were twenties participants from College of Risk Management and College of Sports Science. They planned the curriculum by discussing the study objectives, learning strategies and evaluations, throughout the discussion at small group work and plenary session.

キーワード：FDワークショップ，初年次教育，危機管理学部，スポーツ科学部

Keywords:

FD workshop, First year experience, College of Risk Management, College of Sports Science

はじめに

本報告は、2019年9月28日に日本大学三軒茶屋キャンパス1号館1005教室にて開催された全学FDワークショップ@三軒茶屋キャンパスの概要を述べたものである。2016年4月に開学した三軒茶屋キャンパスには、危機管理学部およびスポーツ科学部が設置されている。いずれの学部も社会科学を背景にした専門教育を行っているが、総合教育科目のうち総合科目については、両学部の学生が同じ講座を履修している。本ワークショップの参加者には、総合科目担当教員が多数含まれていることから、両学部合同のクラスを前提にした初年次教育のカリキュラムプランニングをその目的として設定した。

ワークショップで使用した教材は、2018年度版の「全学FDワークショップ」のものを基本としているが、ワークショップの目的を達成するために、一部を改変し使用した。本稿では、ワークショップの概要と各グループの議論のうへで提示されたプロダクト、総括について報告する。

1 全学FDワークショップ@三軒茶屋キャンパスの実施概要

全学FDワークショップ@三軒茶屋キャンパスの実施にあたり、学務委員会内のFD小委員会を中心に企

*E-mail: yamazoe.yuzuru@nihon-u.ac.jp

投稿：2020年2月22日

受理：2020年2月25日

画をし、本部で開催されている全学FDワークショップでタスクフォースとしてかかわった教員を中心に運営の詳細を検討した。タスクフォースの教員5名はすべて全学FDワークショップ参加経験がある。うち宮脇専任講師と原専任講師は全学FDワークショップで複数回のタスクフォースの経験があり、企画の中心となった。2019年9月18日に、全学FD委員会プログラムワーキングから薬学部の亀井美和子教授、学務部学務課から関雄太主任にお越しいただき、タスクフォース養成プログラムを実施し、説明内容の確認、進行の確認を行った。

ワークショップの参加者を教員12名とし、それぞれの学部から6名ずつ募った結果、表2に示す12名が参加を表明した。構成は先述の通り、両学部の学生が履修する総合教育科目担当教員が半数を占め、その他の教員も自主創造の基礎をはじめとする1年次配当科目を担当している。初年次の学生と日常的に接し、本キャンパスに入学する学生の特性を把握しており、初年次教育について検討する適任の教員が集められた。これらの参加者をA、Bの2グループに分け、ワークショップを実施した。

ワークショップの日程を、表1に示す。実際の運用は、議論の時間が不足する一方で、休憩時間を確保する必要もあり、数分の遅れが発生したが、ほぼ予定通りに実施された。以下に各セクションの概略を示す。

表1 全学FDワークショップ@三軒茶屋キャンパス 日程表

時刻	内容	時間配分	担当者
9:45	受付		
10:00	開会式 挨拶：山添 謙 ワークショップの進め方	5分 10分	松尾 絵梨子
10:15	【初年次教育の問題点】 KJ法・二次元展開法 説明 グループ討議 発表・討議（発表6分質疑5分×2班）+2分	25分 50分 24分	上野山 晃弘
11:54	休憩	10分	
12:04	【学修目標】 説明 グループ討議【昼食】 発表・討議（発表4分質疑4分×2班）+2分	20分 50分 18分	宮脇 健
13:40	【学修方略】 説明 グループ討議 発表・討議（発表6分質疑4分×2班）+2分	20分 50分 22分	木村 敦
15:12	休憩	10分	
15:20	【学修評価】 説明 グループ討議 発表・討議（発表8分質疑4分×2班）+2分	20分 50分 26分	原 怜来
16:58	閉会式 修了証授与		

表2 参加者及びスタッフ名簿

【参加者】

所属	氏名	資格	担当科目(専門)
危機管理学部	工藤 聡一	教授	ロジスティクス論
危機管理学部	小向 太郎	教授	情報法
危機管理学部	先崎 彰容	教授	倫理学
危機管理学部	大八木 時広	准教授	国際政治学
危機管理学部	永沼 淳子	准教授	民事法
危機管理学部	山下 博之	専任講師	災害対策論
スポーツ科学部	山崎 眞紀子	教授	日本近現代文学
スポーツ科学部	山本 大	准教授	コーチング学
スポーツ科学部	種ヶ嶋 尚志	准教授	スポーツ心理学
スポーツ科学部	今野 広紀	准教授	医療経済学
スポーツ科学部	日吉 秀松	准教授	政治学
スポーツ科学部	谷口 郁生	准教授	情報教育

【タスクフォース】

所属	氏名	資格
危機管理学部	木村 敦	准教授
危機管理学部	上野山 晃弘	専任講師
危機管理学部	宮脇 健	専任講師
スポーツ科学部	松尾 絵梨子	専任講師
スポーツ科学部	原 怜来	専任講師

【協力, オブザーバー】

所属	氏名	資格
薬学部	亀井 美和子	教授
短期大学部(三島校舎)	石川 元康	准教授
学務部学務課	関 雄太	主任

【企画, 運営】

所属	氏名	資格
危機管理学部	山添 謙	准教授
スポーツ科学部	清水 千弘	教授
薬学部	亀井 美和子	教授
短期大学部(三島校舎)	石川 元康	准教授
教学サポート課	梅野 敬裕	課長補佐
教学サポート課	鈴木 賢治	主任

a) 開会式

山添より、本ワークショップの趣旨と教育改善へ向けた全学的な取り組みとの関係が説明され、三軒茶屋キャンパスでの取り組みの第一歩であることが強調された。

b) ワークショップの進め方(説明担当:松尾 絵梨子)

ワークショップの定義、ワークショップの原理、ワークショップの期待効果、グループワークの進め方(役割分担)と全体討議の議論などのワークショップの進め方が説明され、参加者の積極性がワークショップ成功のカギであることが示唆された。

c) 初年次教育の問題点抽出のためのKJ法・二次元展開法(説明担当:上野山 晃弘)

このセッションは、初年次教育の問題点を抽出することを目的としている。本部の全学FDワークショップでは2つのセッションに分けられているものを1つのセッションで取り扱うこととなるため、説明内容が広範にわたる。それらは、前半では、日本大学教育憲章、初年次教育の重要性、KJ法について、後半では二次元展開法の実施方法が説明された。

三軒茶屋キャンパスでは、シラバス作成ワークショップの際に日本大学教育憲章の8つの能力について説明を行っているが、今回のワークショップにおいては能力だけでなく「~できる」との説明を明示し、のちの学修目標の設定の際の手助けになるようにした。また、KJ法においては、文殊カードの代用として6枚のポストイットを貼ったボードを用い、関連する意見が出やすいようにした。初年次教育の問題点の指摘においては、関連する教育憲章能力を3つ程度挙げることにした上で、両学部の履修系統図に示されていることにならない、「強く関連」を◎、「関連」を○とし、複数の能力の関係の強さを明確にすることとした。その結果、各グループからは以下の「初年次教育の問題点」が抽出された。

A: 初年次教育の最重要の問題点として「学生のモチベーション」をよく見つけ、日本大学教育憲章の8つの能力の中から「問題発見・解決力」(◎)、「コミュニケーション力」(○)を初年次で教育するカリキュラムプランニングを行う。

B: 初年次教育の最重要の問題点として「学生の基礎的能力、モチベーションを引き上げる教員のスキル」をよく見つけ、日本大学教育憲章の8つの能力の中から「問題発見・解決力」(◎)、「挑戦力」(○)、「省察力」(○)を初年次で教育するカリキュラムプランニングを行う。

d) 学修目標(説明担当:宮脇 健)

まず、学修のプロセスに基づいて、初年次教育の問題点として提示された問題点をカリキュラムへ展開する流れが提示された。とくに、カリキュラムの三要素(目標、方略、評価)のサイクルを認識したうえで、的確な学修目標を設定する必要があることが説明された。ミクロレベルの授業の計画を策定するにあたり、ミドルレベル、マクロレベルの教育目標との関係を明確にした上で、ミドルレベル、マクロレベルで検討された能力ごとの学びの深さとの関係も示したカリキュラムプランニングが求められることが説明された。各グループでの検討の結果、**図1**および**図2**に示す学修目標が提示された。

e) 学修方略(説明担当:木村 敦)

前のセッションから引き続き、カリキュラムの三要素のサイクルに従い、学修方略の位置づけが示された。学修目標のうち、学修者が個別行動目標に到達するための手続きとして、学修方法の種類と順次性を明示し、かつ必要な人的資源と物的資源を選択し、効果的かつ現実的な方略を検討する必要があることが説明された。全学FDワークショップの教材は「医学教育者のためのワークショップ(通称:富士研)」をベースにして



グループ名： 班 セッション：学修目標
 コース：三茶学部
 ユニット：新自主創造の基礎

一般目標：自ら道を開くために、問題解決に必要な知識を修得し、主体的かつ協調的に問題解決を実践することができる

NO.	行動目標 (SBOs)	(領域)
①	社会の諸問題に関心を持つことができる(知識・想起)	
②	社会問題の論点を指摘することができる(知識・解釈)	
③	問題解決の制約要因を抽出することができる(知識・解釈)	
④	問題解決の方略を合目的に選択し、実施することができる(技能・模倣・コントロール)	
⑤	コミュニケーションによって、問題意識を共有することができる(態度・受け入れ)	
⑥	コミュニケーションによって、問題解決の意識を示すことができる(態度・反応)	



日本大学FD推進センター

図1 A 班の学修目標



グループ名：B班 セッション：学修目標
 コース：総合科目
 ユニット：基礎演習 I

一般目標：問題を発見し、解決できるようになるために、テーマの設定と調査、論点の抽出、議論、報告をとおして、学修言語4機能を高める。

NO.	行動目標 (SBOs)	(領域)
①	自身の関心のあるテーマを挙げる (知識) 解釈	
②	テーマの背景、現状について、調査する (技能) コントロール	
③	テーマの背景、現状に関する調査内容を整理し、まとめる (知識) 解釈	
④	テーマの論点を設定する (技能) コントロール	
⑤	テーマの論点について自身の考えをまとめる (技能) コントロール	
⑥	テーマの論点について自身の考えを明確に発言する (態度) 反応	
⑦	テーマの論点について他者の考えを傾聴し、配慮する (態度) 反応	
⑧	テーマの論点について異なる意見を持つ他者の考えに建設的発言をする (技能) コントロール	
⑨	テーマの論点に関する議論の内容から報告する (技能) コントロール	

図2 B 班の学修目標

いることから、人文・社会科学系の学部の教員にとっては、とくに学修方略の選択において、いくつかの違和感を覚えるところがある。この点について、説明者の疑問に基づいて調査された補足資料が文献表と共に説明資料に添付され、違和感の解消に資することとなった。とくに「学修ピラミッドって何？信頼できるの？」との問いに対して土屋（2018）に基づいて「現在では妥当性について否定的な見解も多く、慎重な検討が必要」との見解が示され、初年次学生に大学での学びの態度として提示している「批判的なものの見方」の重要性を教えられた。

f) 学修評価(説明担当：原 怜来)

最後のセッションは学修評価である。教員と学修者との認識に乖離が起きやすいパートでもあり、かつ学修者の利害に直結するため、シラバス作成においても慎重に設計されなければならない。三軒茶屋キャンパスでは、開学以来「形成的評価」を重視し、小テストを実施した場合には「評価の観点」と「フィードバックの方法」をシラバスに明示することとなっている。一方で、シラバスに示された評価項目と、卒業・進級に関わる総括的評価との関係が必ずしも明確に理解されておらず、学修評価について説明を聞くことは各自の担当科目のシラバス作成において大いに参考となる。とくに、測定においては5W1Hを考え、学修目標の三領域によって評価の方法や基準を検討する必要があることなどが示された。

各グループでは、これまでの作業を振り返り、学修目標、学修方略の再検討と合わせ、評価の妥当性、客観性、効率性などを考慮して評価の方法を検討した。さらにチェックリストと評価尺度が作成された。

g) 閉会式

全学FD委員会プログラムワーキングの亀井美和子教授と石川元康准教授から全体総括が語られ、参加者には大学本部発行のワークショップ修了証が授与された。また参加者でもあった三軒茶屋キャンパス学務委員長の工藤聡一教授から協力、企画、運営に対して謝辞が述べられた。

2 総括

表3に総合プレアンケートと総合ポストアンケートの結果を示す。いくつかの質問については、プレアンケートに対してポストアンケートにおける「正解」の割合が増加しており、ワークショップにおいて一定の効果があったことが示された。しかし学修目標の三領域ごとの学修方略の選択においては、「どちらともいえない」や「不正解」とされる回答割合が増加しており、医学教育における体系に対して異なる感覚をもって教育現場に立っている教員が少なからずいることがうかがわれる。

2つの異なる学部にも所属する教員間で初年次教育における問題点が共有されていることは、両学部共通の講座を担当していること、また同じキャンパスを共有していることがもたらした効果だと推察できる。必ずしも卒業後のキャリア像が明確でない学生、必ずしも強く希望をしていない大学・学部に入ってきた学生に対して、「社会への関心」や「問題発見能力」、そして「コミュニケーション力」を培う必要があるとの認識が2つのグループに共通して示された。これらの能力は自主創造の基礎においても扱われており、これからも学部の専門性に適った方略によって、改善・発展されることが期待される。

表3 総合プレ/ポストアンケートの結果

	総合プレアンケート			総合ポストアンケート		
	賛成	どちらとも いえない	反対	賛成	どちらとも いえない	反対
1. カリキュラムとは、学科別時間配分表のことである。	9%	27%	64%	0%	8%	92%
2. 学修目標は、教員が何をすべきかを規定したものである。	0%	55%	45%	8%	25%	67%
3. 学修目標として個別行動目標を設定することは、教育活動を規制するのでよくない。	9%	45%	45%	0%	8%	92%
4. 学修目標を設定しなくても、正しい評価は可能である。	0%	18%	82%	0%	0%	100%
5. 講義は、知識の伝達に欠かせない教育方法である。	36%	64%	0%	50%	50%	0%
6. 実習(研修)に際して、事前に関連する知識を十分に教えておくことが欠かせないことである。	27%	73%	0%	58%	33%	8%
7. 問題解決の教育には、教員がまず問題解決の仕方を示すことが欠かせないことである。	27%	36%	36%	8%	58%	33%
8. 学修には順次性が大切である。	45%	45%	9%	100%	0%	0%
9. 技能の評価は、口頭試験で行うことができる。	0%	64%	36%	25%	33%	42%
10. 態度の評価は、論述試験では不可能である。	45%	27%	27%	67%	25%	8%

むすびに

全学的に推進されている教育改革において、マクロからミクロまでの層位ごとの教育改善の必要性を認識し改善を実行できるFDerの養成は、喫緊の課題であろう。これは、文部科学省が主導する大学改革の流れにも適合しており、日本の大学に関係するものは避けては通れない。その方略として、全学FDワークショップ@キャンパスが各部科校において実施されており、日本大学教育憲章から導かれる教育目標を共有するためには、今後も全学FDワークショップ@キャンパスの継続は必要であろう。一方で、それぞれの@キャンパスの実践の中で示された違和感も掬い取っていく必要がある。各部科校に入学してくる学生はそれぞれ知識・技能・関心など異なっており、多様な学生に対して行う教育の方法も必然的に多様となることは自明である。

とくに初年次教育は多様な学生のニーズを把握する貴重な機会でもあり、多様な入試方法によって入学してくる学生の特性も年度ごとに異なる中で、学修活動を始める前の「診断的評価」も積極的に検討していく必要がある。

参考文献

土屋耕治 (2018), 「ラーニングピラミッドの誤謬：モデルの変遷と“神話”の終焉へ向けて」『人間関係研究』第17号, 55-74
ページ.